

走れ思い出

山線軌道

》3《

私が入社して間もなく、美館の鉱山(千歳鉱山)の操業が活発になり、多数のハシゲが金鉱石を積んで湖畔にわたって来て、それを山線で苫小牧へ運びました。鉱山の人たちは「山線に世話になっているから」

た。その持って行く金額が七、八十円ぐらい。当時の私の日給が六十四銭でした

私は昭和十年五月に山線に入り、苫小牧駅の給仕係になりました。どういっわけか歴代の給仕は「デコ」というあだ名がついていて、私もそう呼ばれました。私の勤めていた駅は能登さんの版画にある駅舎の以前の小さなものです。ふだんは駅長と助役と私の三人だけ。その頃、山線の従業員は三十人ぐらいだったと思います。

給仕の仕事は約一年間勤めました。早朝、木の枝を集めてつくったホウキで、駅の前に筋目をつけたり、木材や客を乗せた運賃を駅長が精算した後、会社の会計係に運ぶ仕事がありました

メモ 昭和十一年の旅客運賃表によると苫小牧から六哩(マイル)三十銭、勇振(十二哩)五十銭、丸山(十三哩)七十銭、分岐点七十銭、滝ノ上八十銭、湖畔八十銭、水溜(第一発電所)九十五銭、牛ノ沢(第三発電所)九十五銭、上千歳(第四発電所)一円十銭。同年、郵便ハガキが一銭五厘だった。

係仕給とされた呼ばれたデコ
末始の後汁チップした苦

から、袋に入れて持って歩くのがとても恐ろしかったものです。支笏湖ではチップがよく



版画・能登正智さん(苫小牧市糸井389-9)



釣れていました。今のチップとは比べものにならないほど大きくて、三十五銭ぐらいのものばかりで、湖畔につないだハシゲの上からよく釣れました。

チップ釣りの客は、釣ったチップを御用カゴに入

れ、客車のデッキに置いて苫小牧まで運びます。するとその汁でデッキが生臭くなり、その汚れをブラシで苦労してこすり落とすのも給仕の仕事でした。いやな仕事で、駅長にしかられないのがつらいものです。

と、シーズンにはチップやキノコをどっさり駅に持って来ました。それを分けて、自販車の荷台につけて上司の家に配って歩いた思い出があります。

苫小牧市北光町二ノ六 岡田徳吉(八十三歳)